



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1,2歳児の母親への愛着と子ども間相互交渉との関連
Author(s)	山根, 悦子
Citation	北海道大學教育學部紀要, 39, 333-345
Issue Date	1981-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29252
Type	departmental bulletin paper
File Information	39_P333-345.pdf



1, 2歳児の母親への愛着と 子ども間相互交渉との関連

山 根 悦 子

The nature of attachment in one- and two-year-olds and
its influence on their behavior in peer interaction

Etuko Yamane

問 題

この研究は母親への乳児の愛着の質が乳児が見知らぬ同年齢児と接する場合の相互交渉のし方にどのような関連を持つかを検討するものである。同時に母親への愛着行動、見知らぬ大人への行動、そして同年齢児との交渉における年齢差、性差を検討する。

1. 愛着の質

愛着とは広義には“あるひとが他の人々に対して精神的に結びつきたいという欲求を持つ状態”を言う(高橋, 1976)。しかし、ここでは愛着を乳幼児が示す“特定の対象にひきつけられている、あるいは特定の対象と結びつきたいという状態”に限定する。

乳児は最初から特定の対象(多くは母親)に愛着を示すわけではなく、出生直後は人でありさえすれば誰でもよいという「人一般への愛着」を示す。その後、乳児はよく知っている人と知らない人とを区別できるようになり、特定の人々により多く笑うようになって次第に特定の対象に愛着を持つようになる。この後、乳児の行動はこの特定の対象に焦点化されて生ずるようになり、このような状態はかなり年長児になるまで続くと思われるので、乳児が特定の対象に対してどのような愛着を持つかは乳児のその後の発達にとって重要な意味を持つ。

特定の対象(母親であることが多いので以後「母親」とするが必ずしも母親に限るわけではない)への愛着の質的違いを問題にしたのはAinsworth (1967)であり、ウガンダ、アメリカの乳児を生態学的に観察して、乳児によってその母親との関係が異なり、そのことが乳児の探索行動などに関連のあることを発見した。即ち母子関係のうまくいっている乳児は母親を基地として見知らぬ人的、物的環境を探索するが、そうでない乳児は母親を基地として探索できないか、または使用しないかである。Ainsworthらはこのような乳児の行動の違いを母親への愛着の質の違いに帰因すると考え、愛着を「安定した愛着」と「不安定な愛着」とに分けた。

このように分けられた愛着の質が乳児の母親への服従(Stayton & Ainsworth, 1971)、認知発達(Bell, 1970)と有意に関連のあることが明らかにされている。また、愛着の質がかなり安定性を持ったものであり(Waters, 1978)、後の問題解決行動や自己信頼と大いに関連を持つ(Matias et al. 1978)のものであることも示されてきている。これらの結果からも愛着を単に母親との関係という側面に限ることなく、Sroufら(1977)の主張するように乳児の広範な発達側面と絡みあう、体制化されたものとして考える方が適当である。

2. 子ども同士の相互交渉

Piaget (1926)の「幼児は互いに関係する関心も技能も殆ど示さない」という考えに示されるように、乳児期(2, 3歳まで含める)には子ども同士の交渉は存在しないと信じられてきた。従って1930年代に Bridges (1933) や Maudry & Nekura (1939), その他の者によって一時的研究がなされたものの、その後1970年代に入るまで子ども同士の関係を乳児期の問題として取りあげることにはなかった。

1930年代, 1970年代になされた研究によると6カ月児でも他児を志向した微笑の見られること(Bridges, 1933), 13, 14カ月では互いに模倣したりする等(Bridges, 1933; Eckerman et al., 1975) かなり早期から他児を志向した行動がなされることが知られている。乳児は母親との愛着関係を保ちつつ社会的な世界を広げていく。とりわけ子ども同士の関係は次第に大きな位置を占めていくことになり、それは大人との関係では得ることのできない経験、学習の機会を提供する。これまでの子ども同士の交渉に関する研究は種類や発達コースに関心を払ってきた。しかし、愛着の質が認知発達や問題解決行動と有意に関連があったように、子ども同士の交渉の仕方との関連を考えることも重要である。

3. 母子関係と子ども同士の交渉

母子関係と子ども同士の交渉との関係を取り上げる際2つの視点がある。第1の立場は交渉の中で用いられる技能を中心問題とする。母子交渉と子ども同士の交渉とで用いられる技能は同じなのか違うのか、技能の獲得は母子交渉から子ども同士の交渉へと移行するのか、それとも全く独自に獲得されるのか、母子交渉、子ども同士の交渉の発達コースの異同等が問題となり、交渉の中に示される行動の種類、複雑性、順序性などが焦点となる(Muller & Brenner, 1977; Vandell, 1980)。

第2の立場は子ども同士の交渉における積極性、消極性、肯定的行動、否定的行動等の社会性の個人差を母子関係と関連させて考えようというものであり、本論文で扱う問題である。

これには2つの見解があり、母子関係が子ども同士の交渉に大きな関連を持つというものと母親との関係は他の大人との交渉には般化し得ても子ども同士の交渉には般化し得ず、子ども同士の交渉には他の経験が影響しているというものである。Waters et al. (1979), Easterbrooks & Lamb (1979), Lieberman (1977) らは愛着の質と子ども同士の交渉における行動との関連を研究しているが、Waters et al. は1歳3カ月の時の愛着の質と3歳6ヶ月の時の子ども同士の交渉能力と、Easterbrook らは1歳6カ月の時の愛着の質と同時期の子ども同士の交渉能力と、Lieberman は3歳時の愛着の質と同時期の子ども同士の交渉能力との間に有意な関連のあることを発見している。つまり、どの研究においても安定した愛着を持つとされた子どもは子ども同士の交渉で有能性を示す、洗練された交渉を示すなどのことが明らかになった。一方、Clark-Stewart (1979) らは2~2歳6カ月児の研究で子ども同士の交渉と母親変数とが全く有意な関連を示さないことから、子ども同士の交渉における社会性はそれまでの他児との交渉経験と関連しており、母親との相互交渉は他の大人との交渉に般化するかもしれないが、他児との交渉への般化はありそうもないと、母子関係は子ども同士の交渉には影響を与えないという。

しかし、先に述べたように愛着を乳児の広範な発達側面と絡みあう体制化されたものとして考えるならば、愛着の質は同時期、また後の子ども同士の交渉のあり方と大いに関連を持つであろうことが考えられる。Harlow (1978)もまた仲間との愛情を形成するためには母親との愛情系の中での基本的な安心感が形成されていることが人間の子どものためにもサルの子どもの

にとっても本質的, 社会的先行経験であることを指摘している。けれども他児への関心の示し方が年齢によって異なる事を考えるならば (Jacobson, 1980), どの年齢においても愛着の質が子ども同士の交渉のあり方と一様な関係を示さず, 年齢によって関係の様相は違うことが予想される。この点について1歳児と2歳児とを対象にして検討する。

実 験 I

1. 目 的

Ainsworth & Wittig(1969)の考案によるStrange-Situation (見知らぬ状況) を用い, 母親への愛着行動, 見知らぬ人への反応, 見知らぬ環境の探索, 再会時の母親への反応等子どもの行動を全体的に観察することにより, 母親への愛着の質を評価する。

また, 同一の状況に置かれた場合, 年齢, 性によって行動にどのような異同が生ずるかを検討する。家庭環境調査で得られた諸側面と愛着の質との関連を検討する。

2. 方 法

(1) 被験者

1歳児23名 (男:12名, 女:11名, 第1子:12名, 第2子以下:11名) とその母親

2歳児29名 (男:13名, 女:16名, 第1子:12名, 第2子以下:17名) とその母親

以上の被験者は札幌市北区の住民票から該当年齢のもので北大周辺に住居のあるものを選び出し, 手紙で研究への協力を依頼し, その後電話で研究への協力の可否を問うという方法で研究への参加を得られたものである。実験は誕生日の前後一週間以内に実施した。

(2) 遊具: 電話, 家型型はめ, 布製人形, ボール大小1コずつ, 本, うさぎの人形, ままごと道具 (なべ, フライパン, きゅうす, スプーン), 鈴, ミニカー, かさねコップ, ダックボール, ひしゃく

(3) 記録方法

実験中に行なった被験児の行動, 発声は一方視察窓を通じて隣室よりビデオテープに収録される。その後ビデオから①全場面を見通し分類基準に基き愛着の質を各サブグループに分類する。②各行動の頻度, 持続時間をデータ化する。Ⅰ頻度メジャー: 人を見る, 人に話かける, 人に笑いかける, 人に物を示す, 人に物を渡す, 人に物をもらう, 人に接近する。Ⅱ持続時間メジャー: 人にさわる, 人に近接している, 探索している, 遊具で遊んでいる, 泣く。

(4) 場所

北大教育学部附属乳幼児発達臨床センター内の実験室を使用 (図1)。

室内にはクッション, 円型テーブル, 本棚を置くなどして実験室の雰囲気を和げてある。

(5) 手続き

実験は8つの場面から構成されている (表

1)。母親, 見知らぬ人は実験者の指示によって行動の変化, 実験室への出入りを行なう。

母親には家庭訪問時, 更に当日セッションの流れを説明してある。子どもの混乱がはなはだしく実験を中止したい場合はその旨実験者に申し出るよう告げてある。

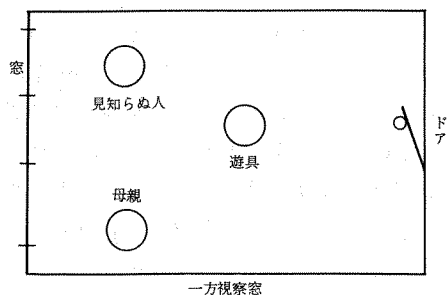


図1 「見知らぬ状況」実験場面

表 1 「見知らぬ状況」実験手続き

場面	参 加 者	時 間	焦 点 と な る 行 動
1	母親, 子ども, 実験者	30秒	実験室への導入
2	母親, 子ども	3 分	母親が居るもとでの見知らぬ環境の探索
3	母親, 子ども, 見知らぬ人	3 分	母親が居るもとでの見知らぬ人への反応
4	子ども, 見知らぬ人	3 分またはそれ以下	見知らぬ人が居るもとでの母親との分離への反応
5	母親, 子ども	3 分またはそれ以上	母親との再会への反応
6	子ども	3 分またはそれ以下	1 人で残された時の母親との分離への反応
7	子ども, 見知らぬ人	3 分またはそれ以下	引き続き母親との分離への反応と 1 人で残された後の見知らぬ人への反応
8	母親, 子ども	3 分	2 回目の母親との再会への反応

子どもは最初、遊具のところに置かれ、その後の行動は自由である。母親は子どもからの働きかけに応じてよいが自分自身から積極的に子どもに働きかけることは控えるように指示されている。但し子どもに危険の生ずる恐れのある場合、子どもが非常に混乱している場合はこの限りではない。見知らぬ人は場面 3 以外は子どもの行動に応じて行動する。母親が居なくて混乱した場合はなだめたりする。一連の場面は子どもの探索行動システムと愛着行動システムとのバランスを明確にするものとなっている。子どもの新奇な環境への反応、見知らぬ人との相互交渉、母親との分離、再会への反応が評価される。

見知らぬ人の役は北大教育学部発達心理学専攻の女子学生 5 人が担当した。

(6) 愛着の質の分類基準

愛着の質の分類は Ainsworth ら(1978)の分類基準にもとづいて実施する。大きくは 3 グループに分類され、さらに下位グループに分類されて全部で 8 グループとなる。各グループの大きな分類基準は以下の通りである。

Group A：母親との交渉や接近を求める傾向をほとんど示さない。母親との分離に際して混乱を示さない。Group A はさらに 2 つの下位グループに分類されるが基準は省略する。

Group B：母親に対して明らかに接近・交渉の要求を示す。母親との分離に際して混乱したりしなかったりであるが見知らぬ人とよりも母親との交渉、接近を求める。Group B はさらに 4 つの下位グループに分類される。B₁：母親との再会に際し笑ってあいさつし、交渉しようとする。しかし、特に接近、接触を求めるということはない。母親との分離に際してはほとんど混乱しないか全く混乱しない。B₂：母親との再会に際し単にあいさつしたり笑ったりするだけでなく、接近、接触を求めようとする。しかし、抱きおろされても激しく抵抗するというわけではない。母親との分離に際してはほとんど或いは全く混乱しない。B₃：母親との再会に際し母親に積極的に接近、接触を求める。抱きおろされるのに激しく抵抗する。母親との分離では混乱したりしなかったりである。B₄：母親との再会時のみならず、ずっと母親との近接、接触を求める。母親がいる間ほとんど母親に執着し探索は活発でない。抱きおろそうとすると激しく抵抗し、母親との分離に際しては非常に混乱する。

Group C：不適応行動を示す。分離前の場面においても見知らぬ環境探索のための基地として母親を用いることができない。あるものは全く探索しないし、探索したとしても楽しんでいないように見えない。母親との接近、接触に対して全く受動的であるか、積極的に接近、接触を求めたとしても両面価値的な態度を示す。Group C はさらに 2 つの下位グループに分

類されるが基準は省略する。

Group Bは安定した愛着, Group A, Cは不安定な愛着をもつものと評価される。

3. 結果

実験Iで愛着の質の分類上の有効ケースは2歳23名(男:8名, 女:15名), 1歳22名(男:11名, 女:11名)であり, 愛着行動の分析での有効ケースは2歳22名(男:7名, 女:15名), 1歳22名(男:11名, 女:11名)であった。

(1) 年齢による行動の差

①愛着の質

表2に示されるように1歳, 2歳ともGroup A, Cに含まれるものはなく, すべてGroup Bに分類される。このことはすべての被験児が安定した愛着関係を持つことを示す。Group Bを下位グループで見てみると全体では $B_1 > B_3 > B_2 > B_4$ の順になっており, 相対的により安定とみなされる B_1 に属するものが最も多い($\chi^2=34.96$, $df=3$, $p<0.005$ ライマンの法 $B_1 > B_4$)。1歳と2歳では B_3 と B_2 の順位が入れかわっているものの有意な差ではなく同じ傾向を示すと言える。

表2 愛着の質(年齢別)

年齢	愛着の質	A	B				C	計
			B_1	B_2	B_3	B_4		
1歳		0	10	3	7	2	0	22
2歳		0	11	6	5	1	0	23
計		0	21	9	12	3	0	45

②母親, 見知らぬ人への行動(図2, 3, 4)

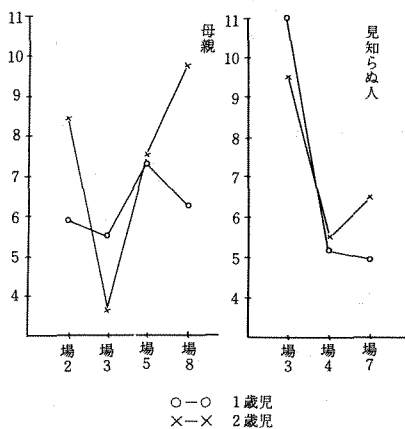


図2 見る行動(回数)

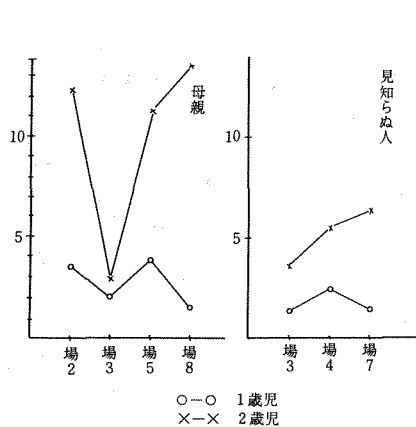


図3 話しかけ, 笑いかけ, 物の提供(回数)

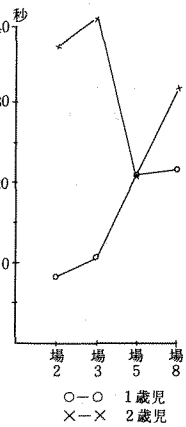


図4 母親への近接時間

見る行動は両者(母親, 見知らぬ人)に対して1歳, 2歳で大きな違いはない。但し, 場2, 8では2歳の方が, 場3(見知らぬ人が入室)では1歳の方が母親を見る事が有意に多い(u 検定 $CR=1.66$, $p<0.05$, $CR=2.03$, $p<0.05$)。

話しかけ, 笑いかけ, 物の提供などの行動は両者に対して2歳児の方により多く見られる。

母親への近接時間はストレスのあまりかからない場2, 3では2歳児の方が, ストレスが最高潮に達した場8では1歳児の方が多い。しかし, 母親への接触は一貫して1歳児の方が多いという傾向が見られる。このことから, 同じく母親への接近行動と言っても近接と接触が子どもにとって持つ意味は年齢によって異なることが示唆される。

③各場面毎の混乱

図5に示されるようにどの場面においても一貫して1歳児の方が2歳児よりも混乱を示すものが多い。しかし、どの場面で最も混乱を起こしやすいかということについては年齢による違いは見られず1人にされる場面6で混乱を起こすものが最大となる。

(2) 性による行動の差

①愛着の質

B_1 , B_2 , B_3 , B_4 に属するものについて性差を見てみると男児では $B_3 > B_1 > B_2 > B_4$ の順であるが、女児では $B_1 > B_2 > B_3 > B_4$ の順であり、男女でパターンが異なる。相対的により安定したグループとして B_1 と B_2 をまとめ、そうでないものとして B_3 と B_4 をまとめて比較すると表3のようになり、より安定した B_1 , B_2 に女児の属する割合が有意に多い($\chi^2=5.51$, at = 1, $p < 0.02$)。この違いは1歳児でより大きい。

②母親、見知らぬ人への行動

母親、見知らぬ人の両者に対して「見る、話しかける、笑いかける、物を提供する」のすべての

行動が男児よりも女児の方に多く見られる。その差は1歳児では場2, 3の「母親を見る」場面3の「母親に話しかける、物を提供する」が、2歳児では場3の「母親を見る」が有意なものとなっている。近接、接触行動は見知らぬ人に対しては性による違いはないが、母親に対しては1歳児では女児よりも男児の方により多く、2歳児では男児よりも女児の方により多く見られる。2歳での差は近接行動によるもので、ここでも年齢によって近接することの意味が異なることが示唆される。

③各場面毎の混乱

図5に示されるように1歳, 2歳ともどの場面においても一貫して女児よりも男児の方に混乱を示すものが多く見られる。

(3) 愛着の質と発達指数

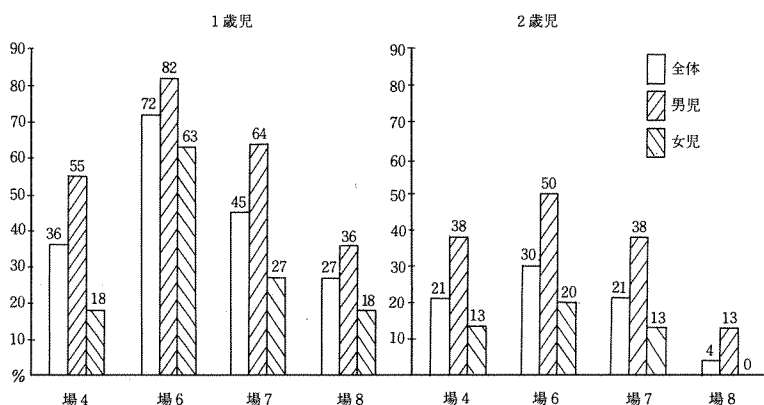


図5 各場面毎、混乱を示したものの割合

表3 愛着の質(性別)

年齢 グループ 性	1 歳		2 歳		全 体	
	B_1+B_2	B_3+B_4	B_1+B_2	B_3+B_4	B_1+B_2	B_3+B_4
男	4 名	7	5	3	9	10
女	9	2	12	3	21	5

表4 愛着の質(DQ別)

年齢 愛着 の質 DQ	1 歳			2 歳		
	B_1+B_2	B_3+B_4	計	B_1+B_2	B_3+B_4	計
Upper	5 名	7	12	11	1	12
Lower	8	2	10	6	5	11
計	13	9	22	17	6	23

MCCベビーテストにより発達指数(DQ)を測定し、愛着の質との関連を見る。DQの平均より上のものをUpper, 下のものをLowerとし、愛着の質を相対的により安定しているものをB₁, B₂とまとめ、相対的に不安定なものをB₃, B₄とまとめると表4ようになる。

1歳と2歳ではDQと愛着の質との関連は逆方向になる。1歳ではUpperの方がB₃, B₄に、Lowerの方がB₁, B₂に属するものが多いという傾向が見られ(イエーツの修正式 $X=1.39$, $p<0.1$), 2歳ではUpperの方はB₁, B₂に属するものが多く、Lowerの方に相対的にB₃, B₄に属するものが多いという傾向が見られた(イエーツの修正式 $X=1.54$, $p<0.1$)。

(4) 愛着の質と母親の行動評定

1歳, 2歳とも「交渉の様式」と愛着の質との相関が見られる。このことは見知らぬ場面で相対的に不安定な愛着を示す子どもは家庭での母親との交渉に身体接触の多い傾向を示す。

1歳, 2歳とも「協同性」は負の方向での相関が見られ, 1歳児において有意に達している。これは子どもに対して妨害的に働きかける母親を持つ子どもほど見知らぬ場面で相対的に不安定な愛着を示す傾向のあることを示唆する。

表5 愛着の質と母親の行動(年齢別)

年齢	項目	感受性	受容性	協同性	接近しやすさ	交渉の始発	交渉の様式
1 歳		-0.01	0.13	-0.48 $p<0.05$	0.30	0.07	0.41 $p<0.1$
2 歳		-0.33	-0.21	-0.24	0.09	0.26	0.46 $p<0.02$

(5) その他

①接触の多様性—接触する人々, 訪問, 外出の機会の多少②父親との接触—遊ぶ時間, 食事をともにする機会, 一緒にいる時間③兄弟順位と愛着の質との相関はどれも有意でない。

4. 考 察

見知らぬ場面を用いての愛着の質の評価の結果は不安定な愛着を持つものではなく, すべての子どもが安定した愛着を持つということを示す。Ainsworth (1978) の報告によるとGroup A 21.7%, Group B 66%, Group C 12.3%という割合を示し, サンプルによって大きな違いはないという。Ainsworth らのアメリカでの研究結果と本研究の結果との違いは何によるものか, 日本での同様の研究はまだ数少ないので判断しかねるが1つには文化差ということが考えられる。日本の育児様式は特に乳児期においてはアメリカに比して母子接触が濃密であることが知られている。そのような育児条件のもとでは乳児は母親に対して安定した愛着を形成しやすいのかもしれない。もう1つ考えられる要因としてはサンプル収集の方法である。形成されたものとしての母子関係の研究ではなく, 形成されつつある母子関係の研究が必要であろう。

(1) 年齢による差

1歳児も2歳児もすべてのものが安定した愛着を示したという点では年齢による差はないと言える。しかし, 母親に対する働きかけ, 見知らぬ人への働きかけは1歳児よりも2歳児に多く見られる。これは1歳児は遊具そのもので遊ぶ傾向があるのに対し, 2歳児は遊具を媒介にして大人と遊ぶ傾向が多いことによる。2歳児が1歳児よりもdistal mode (遠受容器を用いた様式) の交渉を行なうことはよく知られた事実であるが, 同じモードを用いても1歳児では例えば見るということが母親の存在を確認することであるのに対し, 2歳児のそれは交渉を持つということが目的となっていることが推測される。同じことは母親への接近

の様式についても考えられる。ストレスのない場面では2歳児の方が母親への接近が多く、ストレスのかかる場面では1歳児の方が多かった。これは1歳児の方は安心感を得るために母親に接近するのに対し、2歳児は交渉を持つために母親に接近するためであろうと思われる。以上のことから同一の行動でも年齢によって主たる目的が異なることが考えられる。

愛着の質とDQとの関係も1歳と2歳とでは異なる。相対的により安定しているB₁、B₂には1歳ではLowerの方が多く属するのに対し、2歳ではUpperの方が多く属している。このことは等しく母親のいない場面でも見知らぬ人と遊んでいられたり、混乱することなく待たされていても1歳児と2歳児ではその意味するところが異なることが推測される。即ち、2歳児では「母親の行動の予測」が可能なものが母親との分離に十分耐えることができるが、1歳児では特定の対象に対してまだ十分に愛着を形成していないものが類似の行動を示すと考えられる。このことから類似の行動を年齢によって検討することが必要となる。

(2) 性による差

男児も女児もすべて安定した愛着を示すという点でやはり差はないと言える。しかし、各場面毎の混乱するものの割合、相対的により安定したGroupに属するものとそうでないものの割合を見た場合、明らかに男女差がある。男児の方がより混乱し、相対的により不安定なものに属するものが多い。従来の愛着の質に関する研究は性差は見られないという結果を得ている。しかし、ストレスに対しては女児の方が深刻な驚きを示し、新しい環境で母親から離れたがらないということをKagan (1971) やGoldbergら (1969) が報告している。一方、Feldman & Ingham (1975) は男児の方がより泣くという結果を報告しており、一貫した結果が得られていない。

母親、見知らぬ人への働きかけは1歳、2歳とも男児よりも女児に多く見られる。年齢差のところで述べたような遊び方の違いが、男女差についてもいえる。即ち男児は遊具そのもので遊ぶ傾向が、女児は遊具を媒介にして他者と遊ぶ傾向が見られる。Freedman (1974) は双子の研究で女児の方が生後1年間にわたって、より社会的外向的であることを報告しているがこの研究の結果も類似のことを示しているといえよう。

実 験 II

1. 目 的

見知らぬ同年齢児を母親とともに同室させることにより生ずる相互交渉を観察し、交渉の積極性を評価する。母子関係のあり方は子どもの他児との交渉の仕方と大いに関連するだろうという観点から、愛着の質と見知らぬ子どもとの交渉との有意な関連（安定した愛着—積極的交渉、不安定な愛着—消極的交渉）を検討する。

子ども同士の交渉場面における性、年齢による行動の異同を検討する。

2. 方 法

(1) 被 験 者

被験者は実験Ⅰに同じ。但し、実験は1歳児、2歳児とも1歳1カ月、2歳1カ月の前後一週間以内に実施した。

(2) 遊 具

電話、バケツ2コ、ダックボール、ボール大2コ、スプーン、マラカス、ひしゃく、本、人形、皿2枚、輪なげ。

遊具が1つの場合と2つの場合があるのは被験児同士の交渉, 同調的遊びを引き出すためである。

(3) 記 録

2人の観察者が隣室の一方視察窓を通じてそれぞれ1人の被験児を観察する。被験児の行動をあらかじめコード化された記号で10秒毎にチェックする。Ⅰ頻度メジャー：人を見る, 人に話しかける, 人に笑いかける, 人に物を示す, 人に物を渡す, 人から物を受け取る, 他児と同じ遊具で遊ぶ, 他児が手放した遊具で遊ぶ, 他児の遊具にさわる, 他児の遊具を取る, 他児のまねをする。Ⅱ持続時間のメジャー：人にさわる, 遊具で遊ぶ, 人を見る。

(4) 手 続 き

見知らぬ子どもとの交渉を20分間の自由遊びを通じて観察する。被験児の組み合わせはできるだけ月齢の近いものになるようにした。2組の互いに見知らぬ母子が実験者によって同時に実験室に導入される。子どもをそれぞれ遊具のところに降ろしたあと, 母親はそれぞれ指定された場所に座る。母親は子どもからの働きかけには応答してもよいが, 母親の側から子どもに働きかけることは控えるよう指示されている。保護的介入が必要な時はこの限りではない。母親は20分間ずっと同室し, 母親同士の会話は自由である。

(5) 場 所

場所は実験Ⅰに同じ。但し, 円型テーブルを除く, クッション, 本棚を変える等してある。

(6) 分類基準

予備実験から他児との交渉の仕方, 関心の向け方をその積極性によって分類する。20分間の自由遊びを観察したあと分類基準にもとづき各グループに分類する。

Group 1 : 他児に対して大いに関心を示し, 実際的な働きかけも多い。

Group 2 : 他児に対して大いに関心は示すが実際的な働きかけは少ない。

Group 3 : 他児に対して関心は示すが実際的な働きかけはない。

Group 4 : 他児に対してあまり関心を示さない。実際的な働きかけもない。

3. 結 果

(1) 年齢による行動の差

①人を見る行動：図6に示されるように1歳, 2歳では各対象（他児, 母親, 他児の母親）を見る頻度に有意な差は見られない。しかし, 対象毎の見る頻度を検討すると1歳児, 2歳児とも他児>他児の母親>母親という順になっており, 両年齢において見知らぬ大人よりも見知らぬ同年齢児を見ることが多い。

②人に働きかける行動(図7)：これは他者に肯定的に働きかけた行動のみを取りあげ, 物を無理矢理取る, 物を

もらうなどの行動は含まれていない。他児, 他児の母親への働きかけは1歳, 2歳で差が見られない。しかし, 母親への働きかけは2歳児の方が有意に多い (CR=3.72 $p < 0.01$)。

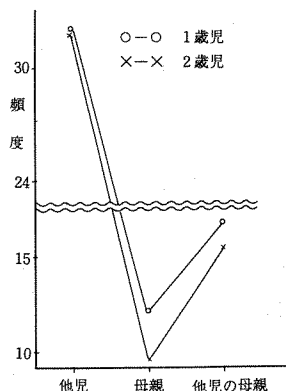


図6 人を見た回数

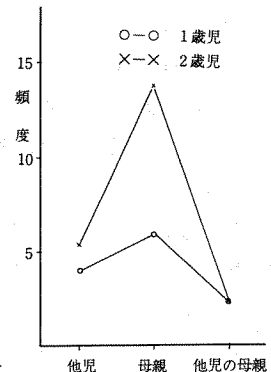


図7 人に働きかけた回数

対象による働きかけの頻度は母親>他児>他児の母親という順になっており、実際の働きかけの対象としては母親が第1に選ばれている。また、働きかけの対象として見知らぬ大人よりは見知らぬ同年齢児の選ばれる傾向も示されている。

③他児との交渉の積極性による分類：表6に示されるように1歳、2歳で同じような傾向が見られ、他児に関心を示さないものは少ない。他児に関心を示すものの中では2歳児の方に実際に働きかけを行なうGroupに含まれるものやや多い傾向が見られる。

(2) 性による行動の差

①人を見る行動：1歳児、2歳児とも、またどの対象についても男児よりも女児の方が見るという行動が多いことを示す。1歳児では母親について($u=26$, $n_1=10$, $n_2=12$, $p<0.02$), 2歳児では他児の母親について($u=23$, $n_1=9$, $n_2=12$, $p<0.02$) その差は有意である(図8)。

②人に働きかける行動：対象毎に性による行動傾向は異なる(他児・男<女, 母親・男=女, 他児の母親・男>女)。しかし、その差は有意でない。

③他児との交渉の積極性による分類：表7に示されるように交渉の積極性では女児の方にやや実際に働きかけを行なうGroupに含まれるものが多い傾向が見られる。

(3) 交渉の積極性と愛着の質との関係

他児との交渉の積極性と愛着の質との関係を見てみると表8のようになる。関連を見る上で有効なケース(交渉の積極性、愛着の質の両方とも分類されたもの)は1歳児21名、2歳児19名であった。全体として見ると他児との交渉の積極性と愛着の質の間には有意な相関は見られない。しかし、年齢をわけて見ると1歳児では $r=0.11$ と有意ではないが、2歳児では $r=0.49$ $p<0.02$ で有意な正相関が見られる。

表6 交渉の積極性による分類

年 齢 \ Group	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4	計
1 歳	4 人	5	10	3	22
2 歳	7	7	5	2	21
計	11	12	15	5	43

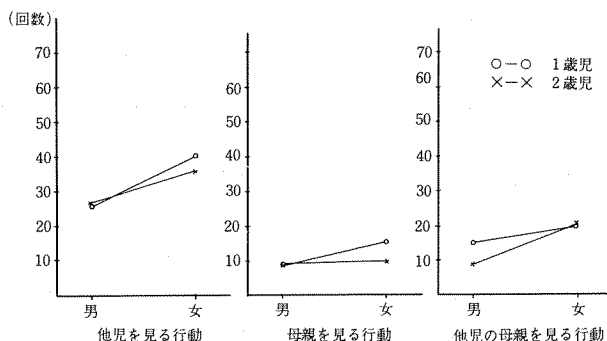


図8 人を見る行動

表7 交渉の積極性による分類(性別)

性 \ Group	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4	計
男	4 人	6	7	4	21
女	7	6	8	1	22
計	11	12	15	5	43

表8 愛着の質と交渉の積極性

他児との交渉 \ 愛着の順	1 歳 児					2 歳 児				
	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	計	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	計
Group 1	3人	0	1	0	4	5	1	1	0	7
Group 2	2	1	1	1	5	4	0	1	0	5
Group 3	2	1	5	1	9	1	3	1	0	5
Group 4	2	1	0	0	3	0	1	1	0	2
計	9	3	7	2	21	10	5	4	0	19

これは2歳児では見知らぬ場面でより安定した愛着を持つと分類されたものは、他児との自由遊び場面で他児に対してより積極的な交渉、関心を示す傾向のあることを示す。

4. 考 察

(1) 年齢による差

交渉による積極性の分類において2歳児の方にGroup 1, 2に含まれるものがやや多いという以外には差は見られない。しかし、他児への働きかけをより詳細に見ると1歳児では他児のおいたものを取る、相手と同じものを取る等の行動が多いのに対し、2歳児は相手に示す、相手に渡す、話しかける等他児に対して直接的に働きかけることが多い。

(2) 性による差

人を見る行動では女児の方が男児よりも多いという結果が得られた。これは実験Ⅰでの結果と同じである。しかし、実際の働きかけという点では一貫した傾向は見られない。

(3) 交渉の積極性と愛着の質との関係

愛着の質の安定している子どもは見知らぬ仲間に対しても積極的働きかけ、肯定的行動を示し、不安定な愛着を持つ子どもは見知らぬ仲間に対して消極的働きかけを示すだろうという仮説のもとに両場面の行動を検討した。不安定愛着を示す子どもがいなかったため、結果的に安定した愛着の下位グループ内での検討となったが、2歳児においてのみそのことが確かめられた。この2歳児の結果はEasterbrookら(1979)の1歳6カ月児の研究結果より安定した愛着を示す子どもは他児に対して肯定的、活発な働きかけを示す一と一致する。2歳児においては母親との基本的な信頼関係を確立している子どもは見知らぬ大人のみならず、見知らぬ同年齢児とも積極的に交渉することができるのであろう。

一方、1歳児でこのような関連が得られなかったのはなぜか。1つには対物、対人への関心の持ち方が考えられる。乳児同士の交渉は事物の存在によってまず媒介され、次第に事物なしでも交渉ができるようになっていくという過程をたどるのであるが、実験Ⅰの結果で述べたように1歳児と2歳児では遊具への対し方が異なる。1歳児では他者との交渉よりも、事物そのものを取り扱う方の興味が優位性を持つために愛着の質とは直接関連しないのではないかと考えられる。もう1つの考えられる理由は他児との交渉という点で1歳児がどのような発達段階にあるかということである。見知らぬ他児への不安(Wariness)は11~20カ月の間に増加することをKagan et al. (1975)は報告している。Jacobson (1980)も10~14カ月半の乳児の研究でWarinessのピークは12カ月にあり、その後、次第に減少していくという結果を得ている。1歳児はこのような段階にあるため他児との交渉の仕方が愛着の質とは直接的に関連しないのであろう。

全体的考察と今後の課題

愛着の質の検討において主要グループについては性差、年齢差は見られなかったが(すべてGroup Bであるため)、個々の行動やDQと愛着の質(下位グループ)、性と愛着の質(下位グループ)との関係に性差、年齢差が見られた。これらのことから、現象の行動は類似なものに見えても年齢によって意味の異なることが示唆され、今後発達段階毎の行動を詳細に把握すること、行動の移行、変化の過程やパターンを調べることが必要である。そのためには同一の子どもを縦断的に追うという研究が必要である。また、下位グループ内で質的に性差が見られるということは、下位グループを質として考えることの検討を生じさせる。このことはサン

ルの収集方法の改善を含め、主要グループについても性差の有無の確認とあわせて検討されねばならない。

家庭での母親の行動、子どもの行動と実験室での子どもの行動との関係は必ずしも明確でない。本研究では2回の家庭訪問で家庭の調査がなされたが、家庭での母子関係を更に明らかにしていくことで実験室場面との関連、意義がはっきりするであろう。

愛着の質と他児との交渉との関連は1歳児と2歳児では異なるという結果を得た。1歳児については同じ結果が得られるかどうかは今後の研究を待たねばならないが、このことは愛着の質が肯定的にせよ、否定的にせよ影響を与えるのは問題となっている発達側面がその時の子どもにとっての発達課題になっている場合であるということを示唆する。であるから、当該の行動分野において子どもがおかれている発達段階を検討しておくことが必要と思われる。

References

- Ainsworth, M. D. S. 1967, *Infancy in Uganda: Infant care and the growth of love*. Baltimore: Jones Hopkins University Press.
- Ainsworth, M. D. S. & Wittig, B. A. 1969, Attachment and exploratory behavior of one-year-olds in a strange-situation. In B. M. Foss (Ed.) *Determinant of Infant Behavior IV*. London: Methuen.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, W., & Wall, S. 1978, *Patterns of Attachment*. John Wiley & Sons.
- Bell, S. M. 1970, The development of the concept of the object as related to infant-mother attachment. *Child Development* 41, 291-311.
- Bridges, K. M. B. 1933, A study of social development in early infancy. *Child Development* 4, 36-49.
- Clark-Stewart, K. A., Vander Stoep, L. P., & Killian, G. A. 1979, Analysis and replication of mother-child relations at two years of age. *Child Development* 50, 777-793.
- Easterbrooks, M. A. & Lamb, M. E. 1979, The relationship between quality of infant-mother attachment and infant competence in initial encounters with peers. *Child Development* 50, 380-387.
- Eckerman, C. O., Whatiey, J. L., & Kutz, S. L. 1975, Growth of social play with peers during the second year of life. *Developmental Psychology* 11, 42-49.
- Feldman, S. S. & Ingham, M. E. 1975, Attachment behavior: A validation study in two age groups. *Child Development* 46, 319-333.
- Freedman, D. G. 1974, *Human Infancy*. John Wiley & Sons.
- Goldberg, S., & Lewis, M. 1969, Play behavior in the year-old infant: Early sex differences. *Child Development* 40, 22-31.
- Harlow, H. F. 1971, *Learning of Love*. 浜田寿美男訳 1978「愛のなりたち」ミネルヴァ書房
- Jacobson, J. L. 1980, Cognitive determinants of wariness toward unfamiliar peers. *Developmental Psychology*, 16, 347-354.
- Kagan, J. 1971, *Change and Continuity in Infancy*. New York: Willey.
- Kagan, J., Kearsley, R. B., & Zelazo, P. R. 1975, The emergence of initial apprehension to unfamiliar peers. In M. Lewis & L. Rosenblum (Eds.), *Friendship and peer relations*. New York: Willey.
- Lieberman, A. F. 1977, Preschoolers competence with a peer: Influence of attachment and social experience. *Child Development* 48, 1277-1287.
- Matas, L., Ahrend, R. A., & Srouf, L. A. 1978, Continuity of adaptation in the second year: The relationship between quality of attachment and later competence. *Child Development* 49, 547-

556.

- Maudry, M., & Nekula, M. 1939, Social relations between children of the same age during the first two years of life. *Journal of Genetic Psychology* 54, 193-215.
- Muller, E., & Brenner, J. 1977, The Growth of social interaction in a toddler playgroup : The role of peer experience. *Child Development* 48, 854-861.
- Piaget, J. 1926, *The Language and Thought of the Child*, New York: Harcourt Brace.
- Srouf, L. A. & Waters, E. 1977, Attachment as an organizational construct. *Child Development* 48, 1184-1199.
- Stayton, D. J., Hogan, R., & Ainsworth, M. C. S. 1971, Infant obedience and maternal behavior: The origin of socialization reconsidered. *Child Development* 42, 1057-1069.
- 高橋恵子, 1976, 「親子関係と発達」岡本夏木・三宅和夫編『心理学5 発達』有斐閣双書.
- Vandell, D. L. 1980, Sociability with peer and mother during the first year. *Developmental Psychology* 16, 355-361.
- Waters, E. 1978, The reliability and stability of individual differences in infant-mother attachment. *Child Development* 49, 483-494.
- Waters, E., Wippman, J., & Srouf, L. A. 1979, Attachment, positive affect, and competence in the peer group: Two studies in construct validation. *Child Development* 50, 821-829.

資料：家庭での母親の行動評定

- ① 感受性—非感受性
- ② 受容性—拒絶性
- ③ 協同性—妨害性
- ④ 接近しやすさ—無視
- ⑤ 交渉の始発—母始発か子始発か
- ⑥ 交渉の様式—身体接触か距離を置いたものか
- ⑦ 緊張—緊張が強いかりラックスしているか
- ⑧ 会話のスムーズ性